Nara Women's University

英語における中学校・高等学校一貫学習指導計画の試案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属中学校・高等学校 公開日: 2010-11-10 キーワード (Ja): カリキュラム キーワード (En): 作成者: 荒木, 孝子, 中西, 正三, 堀内, 幸子, 水町, 律子, 吉岡, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2340

英語における中学校・高等学校一貫学習指導計画の試案

荒木孝子・中西正三・堀内幸子
水町律子・吉岡一郎

はじめに

英語教育については、さまざまな提言がなされ、また多くの書物が出版されているが、現場の教室には、それらの高度な理論以前の問題が多く残されている。今では、チョークとテキストがあれば一つの教室に何人の生徒がいようとも、英語教育は可能であると考える人は多くはないと思うが、現実には、一クラス４０数名の教室で、教師も生徒も悪戦苦闘している。

英語の単語や文章がすらすら口に出てくるようにするには、何度も声を出して云ってみなければならないが、生徒は一時間の授業の間に、発話する機会が何回あるだろうか。（コーラスやL·Lはまた意味が違う。）また単語や文章を書けるようにするには、くりかえし書かせる以外に方法はないが、一度提出させると一クラス４０数枚×担当クラス数のペーパーを月に何度提出させ、行き届いた添削ができるだろうか。

この一クラス４０数名という壁、生徒も教師も忙しいこと、教える場 ― 教室と機材 ― など、これ以上説明しないが、学習条件はきびしい。

基本的見解

本校では中高一貫制になり、中学生全員が本校高校へ進学することになる。これにともなって調整すべき問題がいくつかあるが、最も重要な課題は、これまで高校進学に際して、ふるい落していた下位成績者が本校高校へ進学するので、それらの生徒の学力をどう保障していくかである。

しかし英語科では、これまでもそれぞれの生徒に学習目標を達成させるために、できるだけの努力は試みてきているので、６年一貫制に移行しても基本的姿勢は変わらない。

この基本的姿勢とは、「授業を生徒中心にすすめ、すべての生徒に平易な英語を徹底して身につけさせること」である。「平易な英語」を強調するのは、とかく受験のための、なぞ解き的な英語を学ぶことが英語の実力を身につけることだと考えられ、そのために本来の英語教育がゆがめられてきているからである。

英語科としては、６年一貫によって生じたこの課題には、これまで以上にとりくむが、６年一貫制の継続的指導の利点の活用を積極的に考えたい。

さて６年一貫制のカリキュラムであるが、６年を〔1. 2. 2. 1〕あるいは〔1. 2. 1. 2〕に分ける興味深いプランも考えられるが、とくに中学校では、学年ごとに無償配布の教科書を受けることもあるので、これまで通りの中学３年間と、高校３年間の二期に分けて考える。そして各学年の授業は、その学年の教科書を中心にし、それに特別指導項目またはテーマを加える。指導内容の学年配当は文部省指導要領に従い、変更は加えないので、ここでは述べない。以下６年間の特別指導項目またはテーマを中心に話をすすめる。

中高一貫学習指導計画試案

	中学			高校		
学年	1	2	3	1	2	3
学習内容	←文部省指導要領に従う→					
特別指導項目及びテーマ	小人数クラス制 辞書指導 外人講師	英語劇	動詞の集中学習—「中学動詞用例集」による 診断テスト	「英語基本動詞の用例集」（開拓社） —暗記とテスト	「高校基本英単語活用集」（研究社） —暗記とテスト	
				「私たちの生活—家庭と学校—」	「奈良」	「人間とは何か」
時間数	4	4	4	5〈 4 リーダー・文法 1 作文	左に同じ	5〈 3 リーダー・文法 2 作文

〔中学のカリキュラム〕

1．基本的授業方針

最近は、テレビ・ラジオ・レコード・テープ・塾など、英語学習の機会が多く、中学入学前から英語を学ぶものがある。また教科書用の「ガイド」—むかしのトラの巻—が市販されており、授業を受けなくても、各レッスンの英文の意味を知ることが可能である。しかし授業は、中学入学時には英語は全然知らないものとして、また各学年の新しいレッスンは未知のものとしてすすめる。

家庭学習は、復習にとどめ、予習は、時間があれば新しい語句の意味を調べる程度にする。

各学年の授業の基本作業—新しいレッスンを聞く・新しい単語の発音・文章朗読・文の意味—発展作業そして復習は従来通りとする。人によっては英文の訳は、生徒ははじめからできるし（ガイドの役割が大きい）、英語は英語として理解すべきであって、それは程度の低い作業とみるむきもあるが、その見解はとらない。訳は、その作業の理論的意味の説明は省くが、手がたくやってゆく。全体として、授業は生徒中心に進め、どの学年においても、教室が単なる答え合わせの場ではなく、教室の授業そのものが英語の学習になるように努力する。

以下各学年の特別指導事項を説明する。

2. 学年別解説

中学一年　　本校では、授業によっては一つのクラスを二つに分けている場合がある。この方式を積極的に活用し、特に英語は、外国語教育の基本的条件である少人数制にそって、一年生は、クラスを二分して、生徒２０数名に一人の教師とする。中二、中三でも、この方式を取りたいが、現在の条件を考えて、中一に留めておく。授業の進め方は、口答練習と暗誦を徹底し、必要な事は全て教室で、しかもその時間に覚えるように心がける。さらに、入門期に生きた英語に触れさせ、興味を持たせるために、外人講師による授業を置くことが望ましい。また辞書を指定し、辞書の使い方を指導する。

中学二年　　英語劇を特別指導項目とする。英語劇を演じることによって、多くの表現を覚えさせ、また話す力をつける。また教室では、ともすれば英語を、場を離れて、いわば真空状態で学ぶことになり、その結果、言語と指示物との関係が見失なわれやすい。英語劇は、その〔場〕を豊富に提供する。脚本は、教科書のものを使ってもよいし、「英語劇シリーズ（泰文堂）」でもよい。

中学三年　　特別指導項目は動詞とする。これには、「奈良女子大学文学部附属中学校・高等学校研究紀要第１４集」に基づく動詞用例集を使用する。この用例は動詞に関する文法事項つまり時制、法、態、準動詞等がおのずと習得できるように配慮する。

この段階で、動詞を取り上げるのは、英語では、動詞がわかれば英語がわかるとさえ言われるからである。そして、この用例集では、中学の五種類の教科書に出てくる全ての動詞２７６語が網羅されており（本校教科書 Everyday English 中教出版に１７２語）、それによって中学の学力を固め、高校の学習を容易にするためである。

用例集は、生徒全員に持たせ、事前に関係範囲の必要な説明をしておいて、二学期から、二週間に一度の割合で、確認テストをする。全員が全動詞を習得するまで繰りかえす。用例集は、単にこのテストのためばかりでなく、授業にも活用する。

さらに中三の二学期には、本校で作製した中学英語診断テストを実施し、その結果を参考にして中三から高一への進度を調整する。

〔高校のカリキュラム〕

1. 基本的授業方針

高校の授業の進め方は基本的見解で述べた通りである。また、基本作業は従来と同じである。それに特別指導項目とテーマを加える。これは、教科書だけではどうしても内容が単調になり、高校生の知的関心に必らずしも対応しないからである。テーマを設定することによって、英語で物事を見、知り、考え、表現する喜びを高めるのである。

また、家庭学習は、中学では主に復習にとどめたが、高校では予習と復習をさせる。予習は、例えばリーダーの場合、新しいレッスンの語句を調べ、文章の意味を考えさせる。英語では、中学から高校に進学したからといって、語句や文章がすっかり新しくなるわけではない。高一であれば、

中学の英語力でわかる語句や文章がかなりあり、それらに混じって新しいものが出てくる。従って、生徒にとってはこれまでの自分の力で理解できるところと、教室で説明を聞かないとわからないところを見分けることが重要になる。つまり、問題を掴んでくればよいのである。もちろん、この予習も初めから全員ができるわけではないので、どのように問題を掴めばよいのかを授業中に指導してゆく。

高校では、リーダー、文法、作文の三本立てになる。週5時間の時間配当は、高一、二では、リーダーと文法を4時間、作文を1時間とし、高三はそれぞれ3時間と2時間にする。

文法(A New Guide to English Grammar 東京書籍)は高一では75ページまで、高二は76ページから最後までとする。教科書が変わった場合はそれに相応する範囲とする。

便宜上、リーダー、文法、作文に分けるが授業は互いに補い合う形ですすめる。例えば、文法は、文法のための文法ではなく現在も実践しているように、英文を読むための、また、作るための楽とする。この作文1時間は5時間の枠の中ではやむを得ないが、リーダー、文法の時間にも作文力の育成に心掛ける。

英語は、復習の項で述べたように、多くの既習事項+新しいもの、という形で進んでゆくから、授業は、絶えず既習の語句や文章を活用し、進んでいるうちに、復習もされている形にする。これによって生徒はフィードバックの方法と意味がわかるだろう。

以下で、特別指導事項とテーマを解説する。

2. 学年別説明

高校一年　　特別指導事項としては、「英語基本動詞の用例集(開拓社)」を取り上げ、基礎力を確実にする。扱い方は、中三の場合の「動詞用例集」と同じである。また、テーマに、「私たちの生活—家庭と学校」を設定する。作文の教科書(A New Guide to English Composition 1. 東京書籍)レッスン1、2、3課に「学校生活」があるので、これをさらに発展させて、教科書だけでは不足がちな、身近かな生活に関する英語表現に慣れさせる。まず家庭生活や学校生活を述べた文章(例えば Life with the Taylers (American Book Company))を3時間程度読む。そして、その後、約2時間を作文に当てる。これでも不十分であるが、これによって身近かな英語表現へ注意を向けさせる。

高校二年　　基礎学力の確保のために、高一の「英語基本動詞の用例集」に続いて、「高校基本英単語活用集(研究社)」をとりあげる。方法は高一と同じだが、たえずこの本を授業に活用し、そして確認テストをする。

テーマとしては「奈良」を設定する。これは高一の身近な英語を発展させるものである。私たちの住んでいる奈良について書かれた英文を読み、また奈良について書かれた日本文を英訳したり、自分が奈良について知っていることを英訳する。リーディングに3時間、作文に2時間をあてる。

高校三年　　基礎力の確保に、「高校基本英単語活用集」を続けて使用する。リーダー、文法に3時間を当てるが、文法は高二でひととおり終るので、リーダーで復習的に扱う。また作文の2時間では、作文の問題集その他を扱う。

テーマは「人間とは何か」である。人文・社会・自然のいずれを問わず内容の豊かな平易な英文をなるべく多く読ませる。

この時期には卒業を迎えるので進路に応じて、今まで育ててきた基礎的な学力を更に充実させる。